

令和元年6月10日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370488

研究課題名(和文) 韓国南方方言と九州北部方言のアクセント型の同源性の有無に関する通時的・実証的研究

研究課題名(英文) A Historical/Theoretical Study on the Genealogy of the Pitch Accent Patterns of Kyushu Dialects and of the Southern Coastal Dialects of Korean

研究代表者

板橋 義三 (ITABASHI, YOSHIKO)

九州大学・芸術工学研究院・教授

研究者番号：50212981

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語と朝鮮語の方言(ピッチ)アクセントは調査結果や他の研究者の最新の成果を縦横無尽に駆使して両言語の方言アクセント祖型を構築した。日本祖語にはアクセントがあったのに対し、古代朝鮮語、朝鮮祖語にはなかった。日本語と朝鮮語のアクセントについて歴史的には無関係であることが分かった。

朝鮮半島には紀元前には前日本語が基層として高句麗語、百濟語、新羅語に存在していたことが再確認された。日本祖語以前の朝鮮半島における前日本語はこれらの3つの言語に基層として維持され、その支配語(上層語)の語彙の一部をなしたことが分かった。日本語は語彙レベルとしては朝鮮語の中に基層として歴史的に存在していたことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の朝鮮語のアクセントの歴史的変化と現在のその分布の原因を探り、朝鮮語の親言語である朝鮮祖語と扶余祖語はアクセントがなかったことを検証し、その後、その地域により中心的言語が(高句麗語、新羅語)異なるため、地域によってアクセントの分布が異なってきたことを初めて述べた。日本語の親言語である日本祖語ではアクセントがあり、朝鮮語とは全く異なることを初めて示した。さらに、日本祖語のさらにさかのぼってみると、朝鮮半島に日本語祖語のさらに古い語彙が前日本語として存在していることを示し、それが半島を北から南に移動し、最終的には日本祖語という言語として日本列島にのみ残存したことを初めて系統的に示した。

研究成果の概要(英文)：We have found that Japanese and Korean have no genealogical relationship in terms of pitch accent because Proto-Japanese is most likely to have had pitch accent, whereas Old Korean did not have any type of accent system. Although, there was no genetic relationship in accent between the two languages, there was a historical relationship as a Pre-Japanese substratum in Koguryo, Paekche, and Silla.

研究分野：歴史言語学

キーワード：方言アクセント 朝鮮語のアクセント 古代朝鮮語と朝鮮祖語のアクセントの非存在 日本祖語のアクセント 朝鮮半島前日本語の残存

1. 研究開始当初の背景

本研究に対する国内外の研究動向

(1) 従来、日本国内でも韓国国内でも朝鮮語、中期朝鮮語のアクセント研究はだいたいなされてきているが、ほとんどが個別の方言における共時的研究であり、通時的な観点を取り込んだものは非常に少ない。中期朝鮮語の時代から現代までどのように変化してきているかについてのアクセント変化研究は李文淑(2005)孫在賢(2005)李連珠(2010)を除いて活発には議論された論文、著書が少ない。

(2) 現時点では朝鮮半島でアクセントを保持している方言群とそうでない方言群に分かれるが、その両方言群のアクセントの実態調査がなされたのは2000年代に入ってからで、日本国内で活発に韓国人研究者(特に上記3名)によってかなり調査が行われ、その実態がわかってきている。しかし、実際に中期朝鮮語から現代の方言に至るまで総合的にその変遷を議論した、通時的研究を扱った著書や論文は非常に少なく、ましてや朝鮮祖語のアクセント祖型を扱ったものは存在しない。

(3) その中で中期朝鮮語のアクセント体系について、新たな音韻論的解釈が示されたのは、孫在賢(2007)、李文淑(2005)、李連珠(2010; 2011)によるところが大きい。以下にその研究結果を示しておく。李文淑(2005)では、光州方言には中期朝鮮語、慶尚北道方言、ソウル方言と対応関係を示す長母音と、それぞれの方言と異なる対応関係を示す長母音が存在することを示した。対応パターンが異なる長母音は朝鮮語全般に見られる長母音の拡大現象が光州方言では特に広まっている結果である。また、長母音はアクセントとも密接に関係しており、長母音の有無によってアクセント型が決まることがある。このようなアクセント変化は語の長さとも関連し、長い語から長母音の短母音化が起こる。特に、長母音はアクセント類の合流に伴って短母音化を起こすことを明らかにした。孫在賢(2007)では、地理的に慶尚道と咸鏡道の間位置している江原道の方言は、主に多型アクセント地域に分類される慶尚道方言と咸鏡道方言のアクセント体系とそれらの変遷を考える際に非常に多大な影響を与えると考えられる。従来の研究では、江原道のほとんどの地域がソウル方言と同様に無アクセント地域と考えられてきた。しかし、実際には2型と3型アクセントがかなり広範囲に分布し、4型アクセントと1型アクセントも存在していることも明らかにした。また、江原道方言の3型・2型アクセントの成立には高い音節を後ろに延ばそうとする「高の延長」と、末尾音節を低くしようとする「末尾低下」の二つの変化が関係していることを明らかにした。李連珠(2010; 2011)では、現代慶尚道大邱方言との対応について両者の間にアクセント核の性質の違いはあるものの、ほとんど同じアクセント体系であることを明らかにした。またその後の新たな調査と分析(李連珠2011 上記同科研究費報告)により、朝鮮語晋州方言に関して、従来「N型アクセント」としてアクセント型の対立は5つみられる「5型アクセント」と報告されているものがあるが、現在型の対立が4つに減っているとしている。

(4) しかしながら、上記から明らかなように中期朝鮮語のピッチアクセントがソウル方言などのように朝鮮半島中央部方言群ではすべて無アクセント(孫2007: ソウル方言は一型アクセントであることが判明)となり、北東部と南東部の方言群にピッチアクセントが保存されていると従来から言われてきたが、未だその是非が未定である。

(5) 朝鮮語のアクセント研究と同様に、日本語のアクセント研究は以前から非常に活発に研究されてきているが、それとは同じほど進捗していないまでも通時的アクセント研究も最近では特にだいたいなされるようになってきた(Shimabukuro2008; Matsumori2008)。しかし、日本語のアクセントの変遷については未確認な点や不明な点が多く、これから多くの通時的アクセント研究が必須となっている。

2. 研究の目的

「韓国南部方言と九州北部方言のアクセント型の同源性の有無に関する通時的・実証的研究」

最近急展開してきた朝鮮語方言のアクセントの変遷に関する先行研究の成果を参照しつつ、韓国の朝鮮語のアクセントの史的变化を確定し、また地域類型論による韓国語方言のアクセントの方言圏性を1つの作業仮説として取り入れる。即ち、ソウルの無アクセント(一型アクセント)が最も新しいアクセント形式であり、慶尚道方言、咸鏡道方言のそれが最も古いと仮定し、中期朝鮮語からの変遷仮定を確定する。その後韓国南部方言の慶尚道方言と全羅道方言を詳細にフィールド調査し、それと同時にその対岸の九州北部方言群のアクセントを詳細に調査し、両調査結果を突き合わせ、早田(1999)が示唆する両言語の同源性、借用の有無を考察しその結論を得る。

本研究の位置付け

(1) 日本国内外の最新の研究成果と更なるフィールド調査を行うことにより、古代朝鮮語、さらには朝鮮祖語からのピッチアクセント祖型からの変遷を把握することが究極的な目的である。そこで、本研究の位置づけとしては、中期朝鮮語時期からのピッチアクセントの変遷を、先行研究とフィールド調査結果から解明使用等するものである。

(2) 韓国南部地域一帯の方言群を地域ごとに調査し、南部地域一帯のアクセントの変遷

を把握する。と同時に、同様に、北部九州方言の調査も行い、その調査結果を元に、アクセントの変遷を把握する。地域類型論の観点から、早田(1999)の言う朝鮮南部から九州北部への類型的関連性とは同系的関連性の有無かどうかを究明する。

(3) 中期朝鮮語からどのように現代諸方言が分岐したのかを系統的に明らかにした後、その朝鮮祖語のアクセント祖型を再構築し、その祖型を日本語のそれと比較し、どの程度相関関係があるかを見ることで日韓両語の同源性の有無の判断をする。

応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

(1) 地域類型論の観点から日本語方言の分布が見えてきたことやアイヌ祖語再構築の際に北海道アイヌ語のピッチアクセントと樺太アイヌ語の母音の長短の相関関係を科研費で4年間研究してきたことが本来のきっかけである。

(2) これは朝鮮半島中央部の無アクセント方言地域群(孫 2007: ソウル方言は一型アクセント)を中心にしてみると、同心円上の周辺部に位置する、2大方言群(咸鏡道方言(東北方言)と慶尚道方言(南東方言))はピッチアクセントを保持しているという「典型的な方言圏の姿」を見せていると解釈できる。これは地域類型論の視点から中心地に存在していた古い音声・音韻、形式や形態が、後に中心地に生じた、新しい形式や形態にとって替われ、周辺に追いやられたということである。この方言圏現象が補強される事実として咸鏡道方言と慶尚道方言の中間にある江原方言では2,3型が無アクセントの中にも散在しているのが確認されている(孫 2007)し、全羅道方言、特に光州方言でも母音の長短とアクセントとの相関関係がある(李 2005)という事実に基づく。

(3) この方言圏論がどの言語学的レベルにおいても有効であることが最近の地域類型論から明らかにされ(松本 2005a, 2005b) その考え方を韓国国内の南部沿岸方言のアクセント変化現象から日本の九州北部沿岸方言までのそれに敷衍すると、九州北部方言にも韓国南部方言のアクセント類型の何らかの痕跡や類似性、あるいは同源性が見られるものと考えられることができるという仮説を主張するに至った。

### 3. 研究の方法

研究計画・方法

(1) 平成26年度から平成29年度まで慶尚道方言、全羅南道方言、北九州・福岡、佐賀県・長崎県北部沿岸地域、壱岐・対馬方言のアクセントを調査し、地域ごとに音声レベルから文レベルまでのアクセントの分析・考察を行う。

(2) 平成27年度から平成29年度までのアクセントの分析結果を報告書とまとめ、先行研究の成果を十分反映させて平成30年に最終結果を著書として著す。

調査方法:

(1) 調査語彙は予めリストを作成準備しておき、それに従って調査する語彙は単音節語から5音節語まで200項目程度の語、句・文アクセントだけに絞り、ビデオに収録すると同時に高感度マイクで別に録音する

(2) 被験者は役場や教育委員会(日本)に相当する組織機関(韓国)にお願いし、その土地生え抜きの古老(80歳以上)3名程度を紹介してもらっており、少なくとも4~5日に渡ってアクセント、句・文の細部まで収録、録音する。

分析方法:

(1) 各年度に調査・収録した単音節~5音節の語(名詞、動詞、形容詞とそれぞれの品詞の単独形、接続形[日本語名詞: ~が、~を; 動詞・形容詞: ~か、~ね; ~ので、~より; 韓国語も同様]が異なるものを作成)のアクセントから談話レベルの文アクセントをアクセント型に従って、詳細に分析し、それを表にしてまとめる。

(2) 次にその方言のアクセント型を調べる。そのアクセント型が隣接地域の方言のそれと異なっている場合にはその拡張について考察する。

### 4. 研究成果

朝鮮語に関して、最も中心軸となる源流は前朝鮮語の存在であったと考えるが、これは高句麗語、新羅語、百濟語の前身である3国時代以前に半島全体に定着していたと思われるが、基本的には高句麗の中国東北地方も含む一帯からの勢力の南下による、朝鮮半島の北半分の支配、そしてその後の半島全体の新羅の支配、そして高麗へと国家の支配層の変動があった。

その変動に伴う支配(上層)言語のアクセントの変動があったと見る。それはそれぞれの支配層のみならず、その国家内の国民、そしてその国民を形作っている市民の構成員の異なりにより、アクセントも市民のどの位置を占めているかによっても異なり、最終的には支配層である上層語のアクセントと多層をなしている基層語がそれぞれの本来の地域で維持継承されることにより、その地域の方言となってその地域のアクセントを維持継承していった。

その地域のアクセントは本来百濟、伽耶、新羅などの国家をなしていた地域であり、それ

が基層語と成り下がって方言となり、その地域のアクセントを形成していく。ただ朝鮮半島北部半分は基本的には高句麗の古地であるので、そのアクセントの影響が非常に大きかったと見ることができる。新羅や百済の古地がアクセントを有するようになる以前に逸早く旧高句麗の地では無アクセントが維持されていたと見ることができる。それに対して朝鮮半島南東部でも朝鮮祖語の段階では変化がなく、まだ非弁別的なアクセントであった。その後、三国時代にはいり、その後期になり、半島の北半分を支配する高句麗は依然としてアクセントを持たず、半島南東部は百済、新羅が台頭し、中世語型アクセントと慶尚道方言型アクセントの分岐が開始した可能性が高く、少なくともそのような変化を起こすきっかけが作動したと考える。その後は新羅による半島の統一があり、概略、半島の北半分が高句麗語を基層とし、新羅語を上層としたため、その地域の方言はアクセントを持つ方言群となった。それに対し、半島の南部では新羅語が元々の言語であったので、底辺の基層となる前日本語の他には百済がその上に基層として存在するくらいで、大きな基層をなすものではなく、上層に新羅語が位置した。そのため、この地域では新羅語がアクセントを有する言語・方言として使用された。

他方、もともとの朝鮮半島に点在していたと見られる土着民の1種族、前日本人の存在があり、これは高句麗国の勢力の台頭による南下に伴い、半島の南東部の新羅の地域に追いやられ、その一部はそこに残留した。そこで後に古代朝鮮語にまとめられる以前の段階で、その残留した前日本語が最も底辺の基層をなしたと考えられるため、百済や新羅語への影響は非常に限定的であり、高句麗に至ってはさらに限定されたと見られる。そのため、アクセントの領域まで影響を与えることはなく、多くは新羅語を中心として百済語への影響が語彙レベルにとどまったと考えられる。

この前日本語は底辺基層語として朝鮮語の中に埋没して最終的にはその話者が消滅し、死語と化したと思われる。但し、前日本語が死語へ至る早さについては、古都でもあった地域の慶尚道地域は正にクロスロード的場所でもあり、朝鮮語は様々なアクセント体系を次第に発達させつつある中で、その前日本人の人口は長い年月をかけて、非常にゆっくりした速度で減少していったと思われる。現在でも慶尚道は海岸沿いの街以外はだいぶ孤立してたとみられるし、その点からみると、そのアクセントや言語そのものを維持できる格好の場所であり、ゆっくりと言語が大部分置き換わっていった場所と考えられる。その意味でも、アクセントが残る好条件となっていたのではなかったかとも思われる。

その一方で、一部の前日本語の集団は九州を経て日本列島の九州・中国地方に定住し、日本語祖語へと変化する準備段階にはいることになる。この前日本人は再構築された日本語のアクセント祖体系からもわかるように、アクセント核と語声調の両方の複雑さを有していたかもしれないが、おそらく、もっと単純な形式を持ったアクセント体系であったと考えられないこともない。つまり、朝鮮語のアクセント変化のように、「単純から複雑へ」の変化があったかもしれないと考える。

この前日本語の日本列島への移住集団があったことは以下のような語彙により裏打ちされることも示した。それは済州島がもともと朝鮮半島の前日本人が定住していたか、あるいは九州への移動の際にそこを經由して、その一部が定住することになったか明らかではないものの、前日本人がその後済州島に定住していたことは Vovin (2013) で立証していることによる。この点も重要なことであるが、前日本人が朝鮮半島に定住していた傍証ともなる。これは、Vovin (2013) によると、権 (1994) の地名辞典に、済州島の古称は T'mna/tham-na/ (賺羅、耽羅) であり、さらに古い名称は /tambura/ (賺牟羅) とあり、これは朝鮮語では全く意味をなさないが、日本語では tani mura (谷村：谷にある村)、あるいは tami mura (民村：民のための村) と分析できるとしている。ただ現時点ではどちらが本来の名称かは不明としている。どちらにしても、この名称 /thamna/ は朝鮮語では解釈できないが、朝鮮語の語中音消失 (/i/) と同化 (n>m) によってできた名称としている。済州島は 15 世紀以前に朝鮮の支配下におかれ、土着の前日本語の名称も朝鮮語におきかわったものとみてまちがいないであろう。朝鮮の支配以前には前日本語のアクセントがこの島でも使用されていたということは驚きに値する。また、このことから、この節の冒頭でも言及したように、前日本人が日本列島への移動経路の一部だった可能性も示唆するのではないかとみられる。

日本語と朝鮮語のアクセントの史的変化を見てきたが、両者の変遷はことごとく異なっていたという印象を免れない。それは日本では詳細の食い違いがあるにしても、内的構築だけで日本語から現代方言のアクセントの変遷がほぼ一貫して言えるのである。つまり、一貫して「複雑から単純へ」という図式で解釈・説明できると言えるのに対して、朝鮮語のアクセントの変化はそれとは真逆の「単純から複雑へ」というこれまでに見られなかった、壮大な変化が 1 言語に起こったのである。朝鮮語の変化はこの真逆の変化とその後には一般的な「複雑から単純へ」の変化も生じており、このようなアクセントの変化の相反する発達が 1 言語内で同時には当然起こるものでないが、時系列の中で起きうる変化であるということも今回初めて朝鮮語の歴史的変遷からわかったことであり、今回の大きな成果の 1 つといえるであろう。

従来、日本語のアクセント変化のように、一般に方向が内的構築によって実証されることが正しい変化方向であるといえるのに対して、朝鮮語のように、ある特定の品詞との相関

ができたことによる、まさに一般には見られない変化が朝鮮語に見られる。というのは、これまでの内的構築のみによる変化の立証方法に問題があるのではなく、高山(2010)で述べていたように、ある条件化ではこの内的構築は機能しないという格好の例であると考え、このような言語全体にかかわるような構造がどのように進んだためにアクセントとその相関関係を持つようになった要素とが変化したのかというメカニズムの追求すべき大きな課題と見出したことも大きな成果といえるであろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

板橋義三 2018 「朝鮮語の方言アクセントの変化方向について」日本語語源研究会 12月

〔図書〕(計 1 件)

板橋義三 2019 「日本語と朝鮮語の方言アクセント体系と両言語の歴史的関係に関する理論的・実証的研究 比較言語学、言語接触、歴史社会言語学の視座から」現代図書 3月  
xiv + 271 頁

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：金瑜晶

研究協力者氏名：曹銀敬

ローマ字氏名：KIM Yujeong

ローマ字氏名：JO Ungyeong

研究協力者氏名：金英坤

研究協力者氏名：陳海濤

ローマ字氏名：KIM Yeongjon

ローマ字氏名：CHEN Haitao

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。